酒井多賀志公演会@記念事業ニュース No3、 2022-09

記念事業事務局 〒192-0914 東京都八王子市片倉町 703-3

TelFax. 042-637-1345 (留守電にはご用件と連絡先を入れて下さい。後ほどお電話さしあげます)

Mail s.takashi@orgelkunst.org Web サイト http://orgelkunst.org/

猛暑、災害にコロナと、三重苦の夏でしたが、徐々にお祭りや催しも戻りつつありますね。みなさまいかが お過ごしでしょうか。久々に記念事業ニュース第3号をお届けします。

《記念事業 Web サイト リニューアル・オープン》 http://orgelkunst.org/

写真満載のトップ頁に始まり、森のイメージを背景に、CD・楽譜、曲目解説、メッセージなどを掲載。演奏記録や関連記事も充実させました。CDの試聴、YouTubeでの酒井の演奏もお楽しみいただけます。

- ◎酒井多賀志のあゆみ→プロフィール・文献リストと進んで行くと、実際の新聞や雑誌の記事、論文等がいくつかご覧になれます。
- ◎演奏記録は、2006 年に勤務先に提出したリストをもとに、その後の演奏会プログラムや 2010 年ころまでの演奏会の録音テープ等を参照しながら付け加えていきました。未だ抜けも多く、「自主企画」「レギュラー出演(カテドラル・秋田・名古屋)」「放送」以外は未整備の状態です。とくに「依頼」や市民講座等は膨大で、今後も整理を継続していきます。
- ◎サイト下の「<u>お知らせ (ニュース)</u>」では、これまでの記念事業の動きをまとめ、本ニュースへのリンクもございます。「→」をクリックして、どうぞご笑覧下さいませ。
- ※記念事業 Web サイトは「オルガニスト酒井」でも検索できます。

《オルガニスト・作曲家 酒井多賀志のあゆみ》回想(1) 酒井正子

酒井の音楽活動をふりかえると、大体 10 年サイクルで潮目が変化していくように思われます。バッハ・フランクを軸とした古典~現代、バロック、そして自作自演や各種アンサンブルによる「世界音楽」へ。一見不連続なその軌跡は、彼の中では一貫した筋道が描かれるようです。各時期それぞれに演奏仲間やファンは大勢いらっしゃるのですが、その全体像を知る人は少ないのではないでしょうか。

私 (妻・正子) は最も身近でその変遷を見聞きしてきた一人として、僭越ではありますが、彼の音楽的軌跡をた どってみようと思います。

いかにしてオルガニストとして形成され、いかなる表現をめざしてきたのか。彼のメッセージやインタビューも 交えて、今号から各時期ごとに詳述していきます。

お気づきの点・ご感想など、どんなことでもけっこうです。私や記念事業あてにお便りいただけましたら、大変 幸いに存じます。

* * *

はじめにいま一度、彼のあゆみを振り返り、各時期ごとの主要作品(略称)もあげておきましょう。

- (0) オルガン前史;リードオルガンからの出発。オルガニストを志しカトリック吉祥寺教会を訪ね受洗。
- (1)1970年代; 芸大院在学中に万国博オルガンコンクール最高位入賞、以後演奏活動を開始。カテドラル・シリーズの充実、日本の主要な音楽家・演奏団体と共演、この分野の第一人者としての評価を得る。
- (2) 1980年代;転換期、作曲開始。シュトゥルム&ドゥランク(疾風怒濤)の時代。

「光と風と波の心象」(1982)、「流離」(1985)等、自由で瞑想的、幻想的な作風。

- ★シュトルム合唱団・合奏団の指揮、チェンバロ演奏をとおして、バロックの探求。
- ★尺八・箏とのアンサンブル開始(1987~)。
- ★1984年武蔵野市民文化会館、89年純心・江角講堂、91年府中芸術の森劇場のパイプオルガン設置に尽力。
- (3) 1990年代;身近な五音音階のテーマを使った変奏曲やフーガを作曲。

「赤とんぼ」(1991)、「アメイジング・グレース」(96)、「故郷」(97)、「夕焼け小焼け」(98) など。

- ★マンドリン (1990~)、奄美島唄 (1992~) とのアンサンブル開始。
- ★日本各地に、オルガンの披露演奏等のため招かれる。
- ★98 年よりデジタル・オルガンを軽ワゴン車に積み込み、出前コンサートを開始。
- (4) 2000 年代;即興・変奏曲・フーガという、オルガンの三つの様式を組み合わせた幻想曲に取り組む。「イントロダクションとフーガ」(2001)、「さくらさくら」(03)、「我は海の子」(05) など規模の大きな曲が出そろう。全国各地に出前コンサートを継続。
- (5) 2010 年代; 歌やマンドリン、邦楽器とのアンサンブル曲に力を入れる。デジタル・オルガンを使った小金井コンサート(2012~)、平山クラヴィーア音楽研修所の設立とホームコンサート開始(2017~)。

「クリスマスの為の前奏曲とフーガ」(2014)、「一陽来復」(17)。

◎彼はバッハ・フランク等の古典と自作品を並べ、ともに響き合うようなプログラムを組んできました。その 軌跡は、日本近現代に於ける洋楽の受容と新たな創造という、文化史的にも興味深い問題を提起しているよう に思われます。

* * *

<u>(0) オルガン前史;リードオルガンからの出発、オルガニストを志しカトリック吉祥寺教会へ</u>



2歳ころの酒井多賀志

多賀志は酒井太郎・正子の三男として、1948(昭和23)年1月1日、東京・東中野に出生した。正月生まれなので、名前に「賀」を入れたという。両親は台湾2世で、各々台北高商、台北第一高女を卒業。父方の祖父は陸軍のスパイで、中国大陸奥深く潜入して地方語を習得、海南島無血上陸を成功に導いたといわれる。豪放な呑みっぷりで、植民地の民と分け隔て無くつきあい、慕われていた。多賀志はこの祖父に似た、と言われている。

父の太郎は声楽家志望だったが、周囲に反対されその道にはすすめなかった。東京高商に入学すべく内地の予備校に送り出されたが、こっそり音楽学校に入学して学費を使ってしまい、発覚して台湾に呼び戻されたという。その後は台湾のラジオ放送の人気歌手として活躍、三省堂に勤めていたので芸名を春野省三と称したと聞く。藤山一郎ばりの美声の持ち主だった。

彼の家庭には、どこかコスモポリタンな雰囲気が漂っている。日本本土の規範か

らは比較的自由なおおらかさ、「何とかなるさ」という楽天性が感じられるのである。植民地・台湾に由来すると ころが大きいのではないか。

兄二人は台湾で生まれたが、終戦により、一家は本土に引き上げ、 ゼロからのスタートとなった。

父は「物が無くともまず音楽を」と、初ボーナスの半分をはたいて 足踏み式の中古のリードオルガンを購入した。多賀志3歳ころの記 憶では、ある日大きな物が運び込まれたと思ったら、頭の上で親たち の大喧嘩が始まった。母は、家具も無い中あれを買おう、これも買お う、と計画していたのに、何と半分はオルガンに消えてしまったのだ から、さぞ落胆したことだろう。



10歳ころの演奏写真 左奥は津川みち先生

父は、自分のオルガン伴奏で、兄二人にうたわせようと思っていたようだ。やがて多賀志が耳から聞いて父の歌の伴奏をするようになる。「出船」「叱られて」など日本の歌曲ばかりだ。家庭のど真ん中にリードオルガンが鎮座し、それを囲んで皆が歌う。長兄は物理学者、次兄は銀行経営と、兄弟は異なる道を歩んだが、共通するのは歌好きということ。3人とも合唱団で知り合った人と結婚した。

このリードオルガンからの出発が、彼の音楽の重要な基礎となる。学生時代にヨーロッパへ留学をすすめられたが、あえて彼はそれを選択しなかった。「その頃私はバッハの表現をめぐって悩んでいたのですが、『本場』などというものからでなく、 私



音楽教室のあった栄光之園幼稚園の聖堂 (田中久子氏提供)

自身の中からその答えを見つけ出したかった。また日本の民謡、演歌をパイプオルガンで演奏したいと考えていたし、日本独自のものを造り出すことに非常に気持ちが傾いていたからです。子供の頃伴奏していた日本の曲から私のオルガンは出発しているのでしょう」と述べている。article_02.pdf (orgelkunst.org)

とりたてて音楽家系という訳ではなかったが「それならばきちんと習わせて音楽家にしようかという軽い気持ちで」、5歳から正式にオルガンを習った。東京・武蔵境の家の近くに開設された平安学園音楽教室で、津川みち氏(津川主一氏夫人)、ついで7歳からは井上優子氏のレッスンをうけた。

小学生時代は、のびのびと武蔵野の山野をかけ巡って遊んだ。カメやかぶと虫、クワガタに夢中の、動物好きな腕白少年であった。ある日母が机の引き出しをあけたら一斉に蝶が飛びたち、驚かされたという。さなぎを集めて入れてあったのだ。プラモデルにも熱中した。模型飛行機や機関車を巧みに作り、将来は設計技師になりたいとも思っていた。

ただし「オルガンを弾くときだけは大人のような難しい顔つきをする」と評判だった。小学校の音楽の先生は 熱心な方で、沢山の発表の場を作って下さった。ある時何か弾くように言われ、バッハやヘンデルを弾いた。も う一曲何か、と言われて、当時流行の♪お富さんを弾いてびっくりされたこともある。耳で拾ったメロディーを すぐにオルガンで弾いたわけだ。「小学校に入ってからもオルガンを嫌になったことはなく、マイペースででき たことがよかった」と本人は述懐する。['86int.]

中学生になり、本格的に音楽の道をめざすようになる。1961 年(中2)に父と行ったチャリティ・コンサートは大きな転機となった。ピアノ・バイオリン・マリンバ・声楽など選りすぐりの演奏家が出演。父はプログラム



吉祥寺教会の二段鍵盤、10 ケストップのオルガンで練習(高校時代)

の表紙に、「多賀志がプロとして音楽の道に進むきっかけの一つとなった、思 い出に残るコンサートであった。この後開眼して、彼は一途にオルガンの道を 歩むようになったのである」と記している。

この頃イタリア・オペラのモナコやテバルディに心酔、自分の声を録音して テープで聞いてみた。しかし鼻にこもった声で「ああ、これではだめだ」とが っかりして、声楽は断念したという。

同じ 1961 年 (中 2) の秋、ラジオから H. ヴァルヒャの演奏するバッハの「トッカータとフーガニ短調」が流れてきた。北独・リューベックの聖ヤコブ教会の小オルガン (モノラル録音) であった。

「その時の衝撃は忘れられません。その曲をさっそくリードオルガン用の手鍵盤に編曲して、1年がかりでマスターしました。声に一番近く余韻のある楽器という意味で、パイプオルガンを目指し、オルガニストとして歩む決心をしました。」[86int.]。

さっそく母とともに近くのカトリック吉祥寺教会を訪ね、パイプオルガン

を弾かせて下さいと頼む。叙階して間もない後藤文夫神父が迎えてくれた。後藤神父は、お寺の息子でありながら神父の道を選んだ革新的な方で、終生彼を見守り、導いて下さった。この時、オルガン練習を許可するかわりに、二つの約束をかわした。

- ★聖堂の出入りの時は、必ず祈りなさい。
- ★バッハを弾くには、聖書を理解せねばならない。一緒に勉強しましょう。

彼はそのとおりに実行し、一年間勉強の後、高校1年の春(1964年3月28日)に洗礼を受けた。 日曜学校や夏合宿など、教会の活動にも積極的に参加し、宗教的な思索を深めることとなる。

高校は、音楽が盛んだった都立武蔵高校に進学、<u>小泉文夫</u>氏の義兄・今井正五先生(声楽)に指導を受ける。 それからは芸大受験一筋に歩んだ。 [以下次号に続く]



洗礼の記念写真。前列右から3人目が後藤神父 後列右端から代父の村上陽一郎氏、酒井、篠原正神父



代父の村上陽一郎氏(右)と

* * *

《特別寄稿》

◎日本人のオルガンとの出会いは、教会のパイプオルガンの宇宙的な響きのほかに、家庭的で身近なリードオルガンという、もう一つの道がありました。リードオルガンは明治近代化以降、学校教育に導入されて親しまれ、日本で独自の展開があった音楽文化です。

そうした背景について、ヨーロッパ文化史・比較文化論がご専門の梁川英俊 (やながわ・ひでとし) 氏より、ご寄稿 いただきました。

「風琴」の時代: リードオルガン考 梁川 英俊 (鹿児島大学法文学部)

酒井多賀志が幼少期を過ごした家庭にはど真ん中にリードオルガンがあり、少年酒井はそれで台湾からの引揚者であった父親が歌う演歌や日本歌曲の伴奏をしたという。

この話を聞いたとき、私はなかば忘れかけていたリードオルガンという楽器が不意に記憶の中に蘇り、懐かしい 気持ちになるのを抑えることができなかった。

「そうか、日本人のパイプオルガニストにはそのようなオルガンとの結びつきがあったのか」

いま思えば、どうしてこんな当たり前のことに考えが及ばなかったのかと不思議だが、パイプオルガンといえば ヨーロッパの冷たい石造りの教会に嵌め込まれた楽器という印象が強かった私には、少年時代の酒井がリードオルガニストだったという事実が驚くほど新鮮だった。そして、バッハやフランクといった西洋の作曲家の曲を弾

くだけでなく、尺八や筝や島唄とも共演し、自ら日本の四季を感じさせる楽曲を作曲しもしたこのオルガニスト の和洋折衷的な活動の理由が、すとんと腑に落ちるような気がしたのである。

酒井多賀志は昭和 23 年の生まれである。彼の少年時代におけるリードオルガンの存在の大きさは、11 歳年下の私にも充分に想像できる。おそらく昭和 40 年以前に生まれた世代にとって、リードオルガンの音色は何らかの形で幼少年期の記憶と結びついているはずである。少なくとも私の記憶の中にある「童謡」や「唱歌」は、つねにリードオルガンの響きを伴っている。教室でリードオルガンの音色に合わせて歌われる「むすんでひらいて」や「春の小川」は、文字通りこの世代の日本人にとっては音楽における原体験といっていいものであった。

リードオルガンの全盛期は、またリード楽器の全盛期でもあった。小学校の音楽の授業ではハーモニカが必修であったし、カラオケが登場する以前の盛り場の流しが弾いていた楽器は、ギターとともにアコーディオンであった。この二つの楽器はまた、戦後の街中の雑踏の中で傷痍軍人が奏でていた楽器でもあった。つまり、それは「戦中」の音でもあったのである。

.

リードオルガンはその昔「風琴」と書かれた。誰が考えたのか知らないが、絶妙なネーミングだと思う。この名称はそのままの形で大陸にも渡り、中国、韓国、台湾でも使われている。ハーモニカは「口風琴」、アコーディオンは「手風琴」である。漢字というのは便利なもので、こうして並べるだけでこの三つの楽器が同じ系統の楽器であることが一目で分かる。

日本人にとってリード楽器とは、文字通り「風」が鳴らす楽器だったのである。

リード楽器の起源にあるのは、東南アジアの牧笛や角笛だという説がある。雅楽の笙もリード楽器の一種であるから、あり得ない話ではないだろう。それがインドネシアで発達してマウス・オルガンになり、やがてヨーロッパに輸入されてバグパイプやオルガンになったという。この話が事実だとすれば、リードオルガンの音が日本人にとって懐かしい理由も納得できる。

.

リードオルガンがはじめて製作されたのは、19世紀のフランスだった。製作者は家具職人の修行をしてピアノ製作者になったアレクサンドル=フランソワ・ドゥバン(1809~1877年)である。彼は 1830 年に産業革命の最中のイギリスに渡り、滞在中の4年間にオルガンの製作を学ぶ一方、器械製造の技術も習得し、1842年に「アルモニオム(Harmonium)」(アルモニウムと書かれることもあるが、正しくはアルモニオムである)という名前でリードオルガンの特許を取得した。この楽器はその後イギリス、ドイツ、アメリカなどでも製作されるようになり、19世紀末には日本にも渡った。

背景にあったのは、キリスト教の伝道である。1873 年に 260 年の長きにわたって続いたキリスト教禁止令を廃止した日本には、以後明治期だけで 800 人を超える宣教師が訪れた。リードオルガンはこうした宣教師たちとともに、教会で讃美歌の伴奏をするために海を渡った。

日本で最初にオルガンを弾けるようになったのは、教会やミッションスクールに通う子供たちだった。日本の西洋音楽文化導入の先駆けとなったのは、クリスチャンだったのである。いまでは懐かしいリードオルガンの響きも、最初のうちは「耶蘇教」の礼拝につきものの異様な音として忌み嫌われたらしい。それが耳慣れた響きになったのは、明治政府による「唱歌」の導入があった。

.

明治5年(1872年)に学制が公布されたとき、「唱歌」はその14番目の科目として登録された。しかし、明治7年に学校教育が始まっても、その教育はなかなか始まらなかった。伊沢修二や目賀田種太郎らの努力によって『小学唱歌集』の初編が出版されるのは、明治14年(1881年)である。翌年、翌々年には二編と三編も出るが、その教育が全国的に始まるのは、森有礼文部大臣の第一次「小学校令」(明治19年)の後であった。

知られるように、唱歌のメロディーの多くは外国の歌、なかでも讃美歌から採られた。西欧の歌のメロディーを

そのままにして、歌詞のみを儒教風に変えたものが日本の唱歌だったのである。「蛍の光」はもちろん、俗謡のように歌われる「たんたんたぬき」や「ごんべさんの赤ちゃんが風邪ひいた」の元歌が讃美歌であることを思えば、讃美歌がいかに深く日本文化に浸透したかが知れよう。いまでは日本人が故郷の山河を思い出すメロディーとして定着している唱歌「故郷」の作曲者・岡野貞一も、クリスチャンで教会のオルガニストだった。

「唱歌」の伴奏のために官命によって全国の小学校に備えられたのが、リードオルガンである。その普及はすさまじく、明治末には全国の小学校の 9 割近くがオルガンを備えるようになっていたという。需要を見込んで国内のオルガン生産も活発になった。

日本で最初にオルガンを試作したのは才田光則であったが、大量生産には至らなかった。リードオルガンの製造を事業として成功させたのは、横浜の三味線職人であった西川虎吉だった。西川は 1884 年にオルガンの試作品を完成させると、翌年「西川風琴製造所」を立ちあげる。「西川ブランド」は教会用の質のよいオルガンを製造する会社として信頼された。

1887年には浜松で山葉寅楠がリードオルガンの製作に乗り出し、学校への納入を主目的に販路を拡大して、やがて西川を買収する。

昭和 40 年代以降にアップライトピアノが当たり前のように一般家庭に入るまで、日本の音楽文化の中心にあったのは間違いなくリードオルガンだったのである。

少年酒井多賀志にとって、その音はまさに日本の音楽文化そのものだったことだろう。その少年が長じてパイプ オルガニストになり、パイプオルガンで日本の風の匂いや四季の移ろいを表現しようとしたのは、きわめて自然 なことだったに違いない。

こうした酒井の試みは、当時は文字通りひとつの実験だったように思う。しかしそれは、西洋とは異なる文化的 背景を持つ、日本という国におけるパイプオルガン演奏の未来を見据えた創造的な試みでもあったはずである。 その実験がどのような実を結ぶかは、後世に委ねるしかないが、酒井の試みが「風琴」が紛れもなく日本文化の一部であった時代の記憶なしにはあり得ないものであったということだけは、その時代を共有した人間の一人として、ここでしっかりと確認しておきたいと思う。

* * *

《記念事業の活動 21年12月~22年8月》

- ○ライヴ音源(カセットテープ、DAT)の保全とデジタル化
- 三塚幸彦氏のご尽力により継続中です。現在カセット・テープのうちソロ・リサイタルはほぼ終了し、共演コンサートにとりかかるところです。
- ○楽譜;オリジナル作品のデータの保全、整理は、渡邊あみん氏の協力により継続中です。

国内外から注文があり、楽譜をご注文の方には、酒井の生前からの遺志を引継ぎ、自筆の運指譜もお分けしています。

その他、バッハ、フランク等、生前演奏していたオルガン曲についても、自筆で運指をふった楽譜を後世の方 の参考にしていただけるよう整理しています。ご希望の方にはコピーをお分けします。

〇CDの価格改定;リサイタルNo3,4,5,6は、在庫豊富につき 2,000 円、それ以外のCDは一律 2,500 円として、お求めやすくいたしました。

<u>*在庫稀少(数枚程度)、少(20 枚程度)</u>のものもございます。詳しくは Web サイトでご確認下さい。

○クラヴィーア音楽研修所の運営、楽器の保全管理

研修所利用にあたっては登録が必要です。22年5月より、登録者はイベント使用料、オルガン貸し出し料を

50%引きとして、ご利用しやすくしました。この10月には楽器のメンテナンスを予定しています。

- ○Facebook アカウント「酒井多賀志公演会」 みなさんとの交流の場としています(担当:渡邊あみん)。
- ○酒井作品の演奏;JASRAC(日本音楽著作権協会)の記録より
- コロナ禍にあっても、これまでドイツ、イギリスで「流離」が演奏されました。また国内演奏会「なつかしき 日本の調べ」の他、インタラクティブ配信で「秋田民謡による幻想曲」が継続使用されています。
- ○協賛活動;酒井作品を取り上げた演奏会・関連企画に対して、HP に掲載するなど広報に協力しています。 ご関係の方は事務局までご一報ください。

《Youtube 「酒井多賀志公演会 記念事業」チャンネル》 新規公開

♪2021.12.07 公開 ★二周忌を記念して

- ・【酒井多賀志・自作自演の世界①オルガンコンサート No. 24;「日本の詩情と幻想<第一部>】@武蔵野市民文 化会館小ホール 86.6.21
- ・【酒井多賀志・自作自演の世界②オルガンコンサート No. 26; 瞑想的ライヴスペース'87<第一部>】@武蔵野市民文化会館小ホール 87.6.12
- ・【酒井多賀志・自作自演の世界③オルガンコンサート No. 26; 瞑想的ライヴスペース'87<第二部>】@武蔵野市民文化会館小ホール 87.6.12

「完全音程を主体にした3つの作品」Op. 1、「流れゆく雲」Op. 2 - 2、「光と風と波の心象」Op. 3、「残照」Op. 9、組曲「霧の中の幻想」Op. 7、組曲「望郷の夢」Op. 18、組曲「春の歌」Op. 23、「流離」Op. 17 を演奏。1981年に作曲開始以来、1985年「流離」に至る模索から生み出された初期の作品群です。

♪2021.12.29 公開

・<u>☆新しい年の「一陽来復」を願って☆酒井多賀志:幻想曲『一陽来復』0p.74(2017)より「清流」「フー</u>ガ」 ~遺作 CD「和から洋を顧みる」(2019) 収録~

♪2022.02.23 公開

・フランク珠玉の名曲! 【酒井多賀志オルガンリサイタル No.6~セザールフランクの精華】より<前半> @東 京カテドラル聖マリア大聖堂 ライヴ録音 1976.11.17 <後半>コラール第二番、第三番

♪2022.04.13 公開

・【酒井多賀志オルガンリサイタル・第10回記念~バッハとともに】コンサート・フル音源 <第一部>@石橋 メモリアルホール 1978.6.23 / 「恵み深きイエスを喜び迎えん」ほか

<第二部>「トッカータとフーガニ短調」ほか

♪2022.07.19 公開 ★長年の共演者・三塚幸彦氏制作の動画です。

・瞑想的即興曲【流離/SASURAI 酒井多賀志作曲、0rg】op.17(1985)☆ヨーロッパを驚かせた和のオルガン

<今後の公開予定>

- ・秋田リサイタル No17 ライブ (94.5.21);「秋田民謡による幻想組曲」「曙光」ほかヴィドール、デュプレ、メシアン等異色のプログラム。10 月早々公開予定です。
- ・尺八・筝とのアンサンブル
- ・奄美島唄との共演@大島郡瀬戸内町立図書館
- ・組曲「オルガンへの招待」
- オリジナル作品コンサート
- ・酒井多賀志指揮・チェンバロ;シュトルム合奏団定期演奏会
- ・季節の酒井作品;春、夏、秋、クリスマス、新年 等

《音 信》 お便り・コメント有り難うございました。抜粋してご紹介します。

▽関西のオルガニスト・瀬尾千絵さんより

*酒井は2020年1月26日に、日本キリスト教団豊田教会で岡野オルガンの披露演奏を予定していました。 チラシの校正も届いていたのですが、急逝のため瀬尾千絵さんが交代され、ブログでコンサートの様子をお伝えくださいました。https://seochie.blog.fc2.com/blog-entry-382.html

*以下追悼のおことばもいただきました。

・・・最後に皆さんと共に讃美歌を歌いました。

讃美歌 21-532「やすかれわがこころよ」♪

シベリウスのフィンランディアでも有名な讃美歌ですが、つけられた歌詞から、葬儀や記念式などでも良く歌われます。

天に召された酒井多賀志さんへの哀悼の気持ちから、あえてこの讃美歌を選びました。

実は私、酒井多賀志さんとちょっとしたご縁があるのです。

まだ私が学生時代のことです。

酒井多賀志さんが宝塚ベガホールで演奏会をされたことがあって、そのときにアシスタントを務めさせて頂いたことがあるのです。

当時から酒井さんはバリバリの演奏家で、そのエネルギッシュな弾きっぷりをよく覚えています。

自作の「流離」を演奏されて、その奔放な音楽とテクニックに驚きました。

まだまだこれからも活躍なさることだったでしょうに、本当に残念です。

会堂に響き渡る「やすかれ」の歌声を、酒井多賀志さんもきっと天国で聴いて下さってると思います。

豊田教会はじめ岡野さん、コンサートに来て下さった皆様に心から感謝申し上げます。

そして、天国の酒井多賀志さんの平安を心からお祈り申し上げます。

▽追悼のメッセージ、ご感想

- ・音楽は多くの人の心の慰めですから、先生のご苦労と残された魂の曲が広がって行きますように祈ります。
- ・「清流」;素敵な曲で、理屈抜きに楽しめました。最初の部分などは、私にはシンセサイザーの響きと重なって聞こえます。/東洋的な情緒を感じ、心洗われるような印象です/精神が浄められ、前に進む力を与えていただきました/危篤状態の兄を案じていたさなかに聴いて、心が鎮まり慰められました。
- ・「流離」;孤独で,モノトーン,無音というイメージで YouTube に入ったところ、圧倒的な音の世界のはげし さにとりこになりました。/凜としていて良いですね。迫力に呑まれました。

[以上、ありがとうございました]

〈おことわり〉

「記念事業ニュース」はご縁をいただいた方にお送りしておりますが、今後お受け取りを希望されない場合はご提供を中止致しま すので、事務局までご一報くださいますようお願い申し上げます。

なおご提供されました皆様の個人情報は、第三者に預託、提供は致しません。